

陶器師なる主

2008. 07. 01 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

エレミヤ書 18章1節から6節

主からエレミヤにあったみことばは、こうである。「立って、陶器師の家に下れ。そこで、あなたに、わたしのことばを聞かせよう。」私が陶器師の家に下って行くと、ちょうど、彼はろくろで仕事をしているところだった。陶器師は、粘土で制作中の器を自分の手でこわし、再びそれを陶器師自身の気に入ったほかの器に作り替えた。それから、私に次のような主のことばがあった。「イスラエルの家よ。この陶器師のように、わたしがあなたがたにすることができないだろうか。一主の御告げ。一見よ。粘土が陶器師の手の中にあるように、イスラエルの家よ、あなたがたも、わたしの手の中にある。」

エゼキエル書 36章26節、27節

「あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあなたがたのうちに授け、私のおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行なわせる。」

イザヤ書 64章8節

しかし、主よ。今、あなたは私たちの父です。私たちは粘土で、あなたは私たちの陶器師です。私たちはみな、あなたの手で造られたものです。

ローマ人への手紙 9章19節から23節

すると、あなたはこう言うでしょう。「それなのになぜ、神は人を責められるのですか。だれが神のご計画に逆らうことができましょう。」しかし、人よ。神に言い逆らうあなたは、いったい何ですか。形造られた者が形造った者に対して、「あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか。」と言えるのでしょうか。陶器を作る者は、同じ土のかたまりから、尊いことに用いる器でも、また、つまらないことに用いる器でも作る権利を持っていないのでしょうか。ですが、もし神が、怒りを示してご自分の力を知らせようと望んでおられるのに、その滅ぼされるべき怒りの器を、豊かな寛容をもって忍耐してくださったとしたら、どうでしょうか。それも、神が栄光のためにあらかじめ用意しておられたあわれみの器に対して、その豊かな栄光を知らせてくださるためなのです。

テモテへの手紙・第二 2章20節

大きな家には、金や銀の器だけでなく、木や土の器もあります。また、ある物は尊いことに、ある物は卑しいことに用います。

エペソ人への手紙 2章10節

私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。

今日の題名は、『陶器師なる主』とつけましょう。主はエレミヤを陶器師の家に導かれたのです。結果として、彼は主の変わらない恵みのご計画を知るようになったのではないかと思います。もちろんエレミヤだけが陶器師の家に導かれただけではなく、主は私たちのことをも「この陶器師の家に導こう」、「ことばをかけよう」となさっているのではないかと思います。エレミヤは主の召使いとして、主のメッセージを伝えたのです。

エレミヤ書 29章11節

「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。一主の御告げ。一それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」

現代人のほとんどは、将来のことに対して不安でいっぱいなのです。安心して喜びをもって将来に向かうことのできる人は、イエス様を体験的に知るようになった人々だけなのではないでしょうか。主の永遠に変わらないご計画とは、もちろん「恵み」そのものです。

エレミヤ書の18章を見ると、4節に次のように書かれています。

エレミヤ書 18章4節

陶器師は、粘土で制作中の器を自分の手でこわし、再びそれを陶器師自身の気に入ったほかの器に作り替えた。

と記されています。「粘土で器を作る」とここに書いてありますが、この粘土は私たち人間を象徴しています。ですから、主の御心にかなった、主の良しとされる器ができなければいけないということを、ここで語っているのです。粘土は陶器師が満足するように形作られなければ、役に立たないものになってしまいます。粘土である私たちが、神の御子なるイエス様と同じ姿に変えられなければ、陶器師である父なる神は決して満足なさいません。

よく引用されるローマ書8章29節を見ても、主の永遠に変わらない恵みのご計画について、次のように書かれています。

ローマ人への手紙 8章29節

なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。

ひとり子なるイエス様が長子になられることこそ、御父の永遠に変わらない「恵みのご計画」そのものです。主は、もちろん私たちにも一つの目的（すなわち私たちがイエス様の御姿に変えられるようにという）をもって働いておいでになります。

今、読みました4節によると、三つの器があることがわかります。それは、
第一番目、「仕損じた器」
第二番目、「ほかの器」
第三番目「意のままにお作りになった良い器」
の三つです。

*第一番目、「仕損じた器」

「陶器師は、粘土で制作中の器を自分の手でこわし…」と書いてありますが、この一言だけを取り出して考えますと、それは「望みのない絶望状態」になってしまいます。「私の生活はもう台無しになってしまっている」、「私の生活は壊れた器のように失敗の生活だ」、「私にはもう望みがない」と、そのような状態を言い表わしているのが、この「仕損じた器」です。

過去の生活を振り返っているだけに過ぎないでいると、そのようなことになります。きっとそこには、喜びがなく、後悔に満ち、また良心を責めるようなことがたくさん思い出されるのではないかと思います。つまりそれが仕損じた粘土のような者であるのかもしれませんが。「自分は仕損じた器だ。自分には望みがない」と絶望して、生活に暗い影が差し掛かっているような重苦しい気持ちになっている人々は大勢います。「今までのことは仕方がない。今の状態から抜け出て、できるだけ良くなるように努めよう」と考えるようになります。しかしそのように受け止めると、前途に希望は全くありません。その人には「絶望」しかないのです。

*二番目、「ほかの器」

「主は、ほかの器を作った」とここに書かれていますように、主はご自分の御心を成就なさるために、その粘土を捨てることをなさろうとはしないで、ほかの形に造り変えられるのです。

*三番目、「意のままに作った良い器」

「陶器師自身の気に入ったほかの器に作り替えた」とあります。主は最善をなさるお方で

すから、主が意のままに作られた器は、もちろん良い器に違いありません。主は仕損じた粘土をもう一度こねて、意のままに御心にかなう器をお造りになることのできるお方です。同じ粘土で良い器を造ることのできる主が、私たちに、「良い。お前はこころにかなう者だ」とおっしゃってくださるならば、望みに満ち、更に前進することができるはずで

す。私たちがどんな質の粘土でも、どんなに仕損じた粘土でも、主の恵みはそれにまさって勝利して下さいます。主の愛は、全ての問題の上に勝利して下さいます。そして最後の結論として、主は「良い器だ」と言われるのです。

私たちは今日、この三番目の器「主の意のままに作られた良き器」について、考えたいと思います。

主が今日、私たちを陶器師の家に導いてくださり、主のみことばを与えてくださり、私たちの目を永遠に変わらない主の恵みのご計画に向かって開いてくださって、私たちの心が喜びで満ち溢れるなら、良いと願っています。

主が最初の人アダムをお造りになられた時、「非常に良い」とおっしゃいました。しかしご存じのように、この最初の人であるアダム、またそれに続く子孫は、罪によって回復の望みがないと思われるほどまでに、仕損じた器となってしまいました。ローマ書5章12節を見ると、次のように書かれています。

ローマ人への手紙 5章12節

そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです。

しかし、主のご計画は永遠に変わらない計画ですから、たとえ罪がはいってきても動かされることがありません。主は罪に汚れた古い人類を改善しようとはされずに、新しい器に造り変えようとなさいました。新しい器とは、もちろん「イエス様」です。新しい創造のかしらである「イエス様ご自身」です。

このことは、私たちに何を語っているのでしょうか。それは、主は私たちの仕損じた器のような性質には決して満足なさない、ということの意味しているのです。罪に汚れ仕損じてしまった器を、繕って「良くする」ということは決してできません。ただ新しい器に置き換えられることによるのみ、良い器となることのできるのです。それは、イエス様によって初めて可能となるのです。ですから、イエス様はおっしゃいました。

ヨハネの福音書 3章3節

「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」

新しく生まれ変わらなければ、決して救われないと。

コリント人への手紙・第二 5章17節

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

すなわち、そこには「新しい創造」があります。新しい創造とは、どうしようもない人間の中に住まれるようになられた「イエス様」です。

イエス様は、全人類の罪を、また過ち、咎を一身に背負って、代わりに罰せられ、死なれました。コリント第二の手紙5章21節を見ると、本当の意味ではっきり理解できない話です。

コリント人への手紙・第二 5章21節

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。

神とは、すなわち「父なる神」です。神は、全く聖い主イエス様を、私たちどうしようもない人間の代わりに罪とされました。「罪のかたまり」とされてしまいました。どうしてかと言いますと、「それは、私たちが、『この方にあって』神の義となるためです」。

「イエス様は罪とされた」と書いてありますが、エレミヤ書の先ほどの話に当てはめるなら、イエス様は仕損じた器となられ、陶器師によって新しい器とされるために、陶器師の手で潰され、こねられ、死んでしまわれたことを意味しているのです。しかし、イエス様は死なれたと同時に、全く新たによみがえられました。

エレミヤ書18章5節に戻りますと、

エレミヤ書 18章5節、6節前半

それから、私に次のような主のことばがあった。「イスラエルの家よ。この陶器師のように、わたしがあなたがたにすることができないだろうか。」

この主の問いに対する答えは、もう既にイエス様が「新しい器」として与えられたことにより、私たちのものになっているのです。これは私たちにとって何と喜ばしいおとずれでしょう。イエス様が、私たちの罪咎を全部背負って代わりに死んでくださり、私たちの内に存在している仕損じた器である性質を、十字架の上で殺してくださったことが、もう既に過去に行なわれた幸いな「事実」となっているのです。

イエス様において、御父の永遠に変わらない恵みのご計画が成就されました。しかし、イエス様において成し遂げられた神の、御父のご計画は、私たちのうちにも実現されなければ何の役にも立ちません。新しい性質、すなわち、「イエス様のいのち」が、次第に私た

ちの心のうちを占領していかなければ意味がないのです。ですから、イエス様の御姿と同じ姿に変えられていくことが何にもまして大切です。

パウロは、有名なガラテヤ書 2章 20節に、
ガラテヤ人への手紙 2章 20節前半

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。

と証しましたが、このパウロの体験が、私たち一人一人のものとなりますように願っています。もしそのようになれば、主の永遠に変わらないご計画が私たちのうちに成就されたこととなります。主の御心のままに造られて、主に良しとされる器は、イエス様と同じ御姿に変えられた人です。

もう一つの点について考えたいと思います。ではこの主の恵みのご計画が実現するための条件とは、いったいどのようなものでしょうか。私たちが主の御心にかなった器になるために、すなわちイエス様の御姿と同じ姿に変えられるために、三つの条件があります。

第一番目、粘土が陶器師に従うこと。

第二番目、ろくろが必要なこと。

第三番目、陶器師の資質が大切であること。

この三つの条件が満たされなければならないのです。

*第一番目、粘土が陶器師に従うこと。

当たり前のことですが、粘土は陶器師に選ばれます。粘土が陶器師を選ぶのではありません。陶器師は、粘土がそれ自体あまり価値のないものであることを承知の上で選び出します。主は、役に立たない私たちをあまり深く見つめられません。役に立たない駄目な私たちを、恵みの器に造り変えようとなさっています。

イエス様は、当時の弟子たちに次のようにおっしゃられたことがあります。

ヨハネの福音書 15章 16節

「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。」

主は、私たちの哀れな様をご承知の上で、私たちを選ばれたのです。主に従えば従うほど、私たちは自分自身に失望します。自らのうちに何の良きものもないことがわかるようになります。

けれども、幸いにも主は、私たちがそのように哀れな者であることをご承知の上で選んでくださいましたので、主は私たちに対して失望なさるということはありません。しかし主は、私たちが主にすべてをお委ねして、御心のままにイエス様の御姿を形造っていただくことを拒むなら、私たちを失望させなさいます。主に従わないなら、主はその人を失望させなさるのです。私たちが主に従わないなら、どんなことにも失望なさらない神様であっても悲しまれます。粘土が固すぎて、陶器師の手に負えないことがあります。主の御心にかなった歩みをするということは、決して簡単なことではありません。

預言者エレミヤでさえも、主の御心に従って歩いていく過程で、しばしば主に訴えていました。エレミヤにとっては非常に苦痛を覚えたことでした。主のエレミヤに対する御心は、エレミヤにはまことに理解し難いことでした。しかし、エレミヤは主に対して心を頑なにしたのではなく、従いました。従うことこそ、考えられないほど大切なことです。

サムエル上の15章を見ると、この事実も強調されています。

サムエル記・第一 15章22節、23節

するとサムエルは言った。「主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。まことに、そむくことは占いの罪、従わないことは偶像礼拝の罪だ。あなたが主のことばを退けたので、主もあなたを王位から退けた。」

サウル王におっしゃられた言葉です。

反対に、粘土が柔らかすぎて陶器師の手に負えない場合もあります。陶器師がせっかく器の形を造っても、造るとまもなく粘土が柔らかすぎて形が崩れてしまうのです。

神の子どもとされた兄弟姉妹の中の実にたくさんの人が、「移り気」の持ち主であり、また「むら気」で、「臆病」です。多くの人は、風の中の羽のようにいつもふわふわしていて、自分の一番抵抗の少ない道を歩もうとします。

私たちは、実に弱い哀れな粘土に過ぎません。しかし、私たちが御子イエス様の御姿に変えられていくには、どうしても「従う」ことが必要なのです。主が、イエス様によって私たちを選び出してくださったことは、毎日毎日の感謝のもとです。もっともっと恵みを感じて、このことを感謝したいものです。

しかし、私たちが選び出されたということだけでは十分ではありません。なぜ選び出されたかが問題です。粘土があるだけでは十分ではありません。その粘土が陶器師の手の中にあるだけでも十分ではありません。陶器師によって、目的にかなった良い器に造り変えられる必要があるのです。

主は、粘土に例えられる私たちから何を造るかということを知っておられます。また、

どのようにしてそれを造ることが出来るかも、もちろんご存じです。しかし、粘土である私たちは、陶器師である主に従わなければ、どうすることもできません。私たちは、主に「従順」なのでしょうか。従順に主に従っていくことによって、主は私たちをいつも御心のままにお取り扱いになっているのでしょうか。また、私たちは聞く耳を持っているのでしょうか。

サムエル上の3章9節。よく知っているみことばです。

サムエル記・第一 3章9節

それで、エリはサムエルに言った。「行って、おやすみ。今度呼ばれたら、『主よ。お話しください。しもべは聞いております。』と申し上げなさい。」

「主よ。お話しください。しもべは聞いております」。

イザヤ書50章4節、5節には、また次のように書かれています。

イザヤ書 50章4節、5節

神である主は、私に弟子の舌を与え、疲れた者をことばで励ますことを教え、朝ごとに、私を呼びさまし、私に耳を開かせて、私が弟子のように聞くようにされる。神である主は、私の耳を開かれた。私は逆らわず、うしろに退きもせず、

とあります。

もう一箇所、出エジプト記33章11節を見ると、次のように書かれています。

出エジプト記 33章11節

主は、人が自分の友と語るように、顔と顔とを合わせてモーセに語られた。モーセが宿営に帰ると、彼の従者でヌンの子ヨシュアという若者が幕屋を離れないでいた。

私たちが主の御心にかなった器になるためには、つまり御子イエス様と同じ御姿に変えられるためには、条件があります。すなわち、「粘土が陶器師に従う」ことです。

*第二番目、ろくろが必要であること

私たちの生活において、ろくろに相当するものはいったい何でしょう。それは、私たちが毎日そこで過ごさなければならない環境です。私たちは聖書の話聞くことによって、共感を受けます。みことばを読み、祈りのうちに、主との交わりを持つことができます。しかし、実際に主と同じ御姿に変えられていくのは、毎日、日ごとの生活における困難や苦しみを通して初めてできることなのです。

粘土は、ろくろの上にしっかり乗っていないと、良い形になり得ません。聖書を学ぶことにより、私たちは主からいろいろなことを教えていただくようになり、教訓を受け、主の御心を知ることができるでしょう。しかし主と同じ御姿に変えられるためには、日ごとの経験というろくろの上に乗らなければならないのです。

ろくろは止まらないで絶えず回転しています。もし、ろくろがいつも回転していなければ、どんなに巧みな陶器師も器を造ることができません。陶器師が、ときにはあまり強くこねるので、粘土はろくろの上から逃げようと思うことがあるかもしれません。

エレミヤは、陶器師の家へ行ったとき、粘土をこねる人とろくろを回す人が同じ人であることを見ました。ですから、私たちがろくろの上から逃げようとするのは、結局、主の御手から逃げようとするにほかなりません。主は、私たちの生活の隅々までも自らお導きになっておられます。

多くの人々は、私たちがあのところにいるなら、このところにいるなら、もっと靈的に成長するはずなのにと考え、すぐにろくろから降りてしまいます。これは大きな誤りです。

私たちが押し付け苦しめるのは、ろくろではありません。つまりそれは主の御手であるということを忘れないようにしましょう。もちろん、困難とか苦しみは、主が御子の形に私たちが形造る手段に過ぎません。また、いろいろなろくろがありますが、私たちは主の御心を行なわずに勝手に環境を変えないようにしましょう。主が最善の時、最良の方法をもって私たちに導いてくださるはずで

ですから、ヘブル書の著者は、当時いろいろなことで悩んでいた人々に書きました。
ヘブル人への手紙 12章5節、6節

そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れていきます。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」

「主はその愛する者を懲らしめ」です。「嫌になった者を」ではありません。

私たちが主の御心にかなった器になるために、また御子イエス様と同じ御姿に変えられるためには条件があります。今話しましたように第一番目の条件は、粘土が陶器師に従うこと、二番目の条件は、ろくろが必要であることです。

*第三番目、陶器師の資質が大切であること

この陶器師とは誰でしょうか。もちろん人間ではありません。もし人間なら、仕損じた器をどこかに捨ててしまうでしょう。この陶器師は、「創造主なる神ご自身」です。もし人間なら、仕損じた器を元のとおりにしようなどと考えないでしょう。このような駄目になった粘土は「私の思うような器には造れない」と言ってあきらめてしまうことでしょう。しかし、聖書で語っている「まことの神」はそのようなお方ではありません。「この主」に、私たちが「今日新しくお会いすることができる」ように願っています。「この主」にお会いするなら、恵みと知恵と勝利のほほ笑みを浮かべた主の御顔を仰ぎ見ることができるはず

です。どんなに仕損じた器となっても良くしたもう。これが「聖書の主」です。

主なる神は、私たち仕損じている器を造り変えられます。主は、何ものによっても動かすことのできないご計画を持っておられるお方です。主は、最後まで成し遂げることのできないようなことをお始めになりません。そのために主は、知恵、忍耐、恵み、愛、力をお持ちになっておられます。私たちの主は、失望することを知らない「望みの神」です。この主の御手のうちに、私たちは粘土として握られているのです。

主は、粘土である私たちを満足な器に、すなわちイエス様と同じ御姿に変えられるよう造り変えるために、お選びになりました。主の御心の全てが、このご目的に傾いておいでになるのです。

主は、私たちがそのほかのどんなものになったとしても満足なさいません。少しくらい欠けたところのある器は、仕損じた器とは言えないでしょう。ちょっとそこに違うものをくっつけたり、色を塗ったりしてきれいにすることができます。人間はそうするでしょう。けれど主はそうになさいません。主は、御心になかうイエス様と同じ御姿に変えられない以上、決して満足なさいません。どんなに繕っても、色を塗っても満足なさいません。

エレミヤ書 18章6節をもう一度読みます。

エレミヤ書 18章6節

「イスラエルの家よ。この陶器師のように、わたしがあなたがたにすることができないだろうか。——主の御告げ。——見よ。粘土が陶器師の手の中にあるように、イスラエルの家よ、あなたがたも、わたしの手の中にある。」

「わたしも陶器師がするように、あなたがたを御子主イエスのかたちに変えることができないだろうか。」

エレミヤ書 32章27節を見ると、次のように書かれています。

エレミヤ書 32章27節

「見よ。わたしは、すべての肉なる者の神、主である。わたしにとってできないことが一つでもあろうか。」

このように主は問いかけておいでになりますが、実際にはどうでしょうか。信仰のない者だけが主の力を疑うでしょう。エレミヤが主のみことばを伝えようとして出かけて行ったところの人々は、主の民に属する人々だったのですが、不信仰の者たちでした。彼らは何と言ったでしょうか。

エレミヤ書 18章12節

「しかし、彼らは言う。『だめだ。私たちは自分の計画に従い、おのおの悪いかたくな心のままに行なうのだから。』と。」

言い換えるならば、彼らは「主よ。私たちが今のままの状態でご慢してください」と言って、粘土として思いのままの形に造られることを拒んだのです。自らの生まれながらの性質、また生まれながらの能力を使って主に仕えようとする者は、彼らと同じことをしていることとなります。

主は、私たちがどんなに信心深くても、良い性質を持っていても、それが生まれつきのままであるなら、つまり肉的存在であるなら、決してお用いになることができません。

私たちの仕損じた哀れな性質が、イエス様にあって新しくされるためには、「十字架」が必要です。限りない愛と忍耐とを持っておられる陶器師なる主は、ろくろの上に乗っている粘土のような私たちを、その御手にしっかりと握っておられます。主の御手は、私たちの生活の根までしっかりと握られ、そこまで主は干渉してこられますから、時おり痛いこともあるでしょう。どんなにその生活が苦しくても、バプテスマのヨハネのように、「主は必ず栄え、私は必ず衰えよう」という心を、主の御前に絶えず持ち続けたいものです。

最後にもう一箇所読んで終わります。当時、悩んでおいでになる主のみことばです。

詩篇 81篇10節後半から14節

「あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう。しかしわが民は、わたしの声を聞かず、イスラエルは、わたしに従わなかった。それでわたしは、彼らをかたくなな心のままに任せ、自分たちのおもんばかりのままに歩かせた。ああ、ただ、わが民がわたしに聞き従い、イスラエルが、わたしの道を歩いたのだったら。わたしはただちに、彼らの敵を征服し、彼らの仇に、私の手を向けたのに。」

「しかしわが民」です。異邦人たちではありません。

了